

発表番号 5

「コンテナ苗を用いた低コスト造林技術の開発に向けて」

茨城森林管理署 主任森林整備官 漆道 真也
森林整備官 松井 裕樹
地域技術官 君嶋 昭弘

1 はじめに

我が国の林業は主伐期を迎える森林が多くなりつつある現状の中、採算性の悪化に伴う森林所有者の再造林意欲の低下が問題となっており、その打開策として収益性を確保するための低コスト造林技術の確立が喫緊の課題となっています。そこで茨城県内植栽ではこれまでされたことのないコンテナ苗の可能性について調査・検討しました。



写真1 いろいろなコンテナ苗 (左端は裸苗)

2 具体的な取組

当署管内の3地点に調査地を設定し、それぞれの箇所に裸苗とコンテナ苗を植栽し生長量調査及び活着状況調査を実施しました。

・生長量調査

5月中下旬に植栽を行い、5月下旬から6月下旬にかけて、苗高と根元径について1回目の調査を実施し、12月から1月上旬に2回目の調査を実施しました。

・活着状況調査

生長量調査の際に、枯損状況及び被害状況等を調査しました。

3 取組の結果

苗高の生長量については、3調査地全てにおいて、裸苗のほうがコンテナ

苗を上回りました。根元径については、コンテナ苗の種類により差はあるものの、コンテナ苗の生長量の方が同程度か裸苗を上回る結果となりました。活着率については、徳田及び幡地区においては同程度でありましたが、磯原地区においては、裸苗が82%に対してコンテナ苗が99%と顕著な差が出る結果となりました。

4 まとめ

苗高の生長量については、裸苗がコンテナ苗を上回る結果となりましたが、これは根元径が大きく関係していると考えられます。裸苗の根元径が元々大きく、栄養分を上長成長にも多く使用できたのに対し、コンテナ苗は植栽時の根元径が小さかったため、上長成長よりも肥大成長に栄養分が使用されたと考えられます。これは、根元径の生長量について、コンテナ苗が裸苗と比較して同程度か上回ったことから推測できます。

活着状況については、乾燥に強いというコンテナ苗の利点がしっかりと確認できた結果が得られました。

今後、試験的に植栽したコンテナ苗の生育状況等を定期的に検証しながら、低コスト造林に向けて総合的に取り組んでいきたいと考えています。

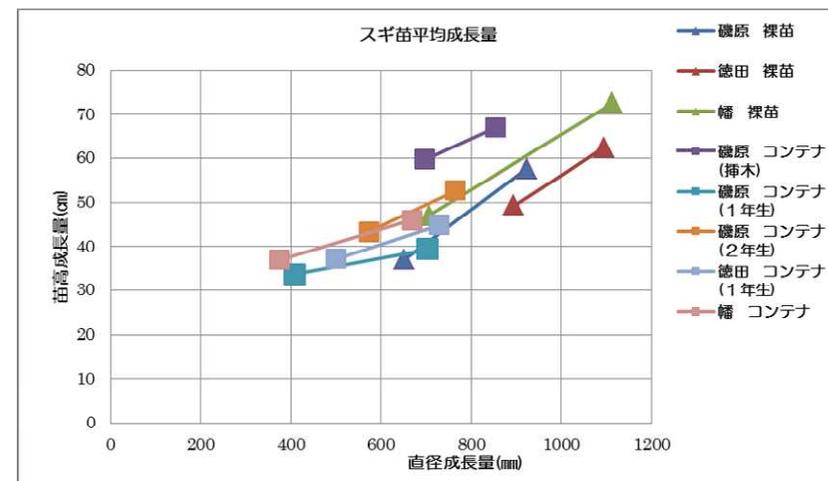


図1 スギ苗平均生長量